

	微酸性電解水 除菌ジアカインド	弱酸性電解水	強酸性電解水	次亜塩素酸ソーダ	電解次亜水	混合次亜水
PH	5~6.5	2.7~5.0	2.7以下	通常の使用濃度では8以上	8~9	6~7.5
有効成分	10~80ppm	10~60ppm	20~60ppm	50~300ppm	10~200ppm	50~200ppm
水の安定性	遮光容器で1年程度は安定	不安定であり、使用時使用場所での調整が原則/タンク貯留や配管による輸送では使用の都度または連続的に有効塩素濃度の確認が必須	同左	前二者より安定	同左	同左
主物質	遊離次亜塩素酸	遊離次亜塩素酸	遊離次亜塩素酸	遊離次亜塩素酸 (アルカリ性のため含有比率が低い)	遊離次亜塩素酸 (pH8以上になると含有比率が低下)	遊離次亜塩素酸
殺菌力	比較的低い有効塩素濃度でも短時間で殺菌効果を示す/細菌、真菌、ウイルスにも有効で細菌芽胞も殺菌できる	同左	同左	細菌芽胞に対する効果は期待できない	アルカリ側では芽胞殺菌効果は期待できない	短時間で殺菌効果を示す/細菌、真菌、ウイルスにも有効で細菌芽胞にも期待できる
金属への影響	ステンレスに影響は小さい、真鍮はやや変色、アルミは白色斑点発生、鉄は水道水より若干錆びやすい	塩素ガスを発生しやすいことや、乾燥によって塩が濃縮されることで微酸性電解水よりかなり腐食しやすい	同左	微酸性電解水と同程度	同左	調合を間違えると、同濃度の微酸性電解水より腐食性がある
危険性	塩素ガスの発生はほとんどないのでタンクなどのヘッドスペースに溜まることはない	貯留タンクのヘッドスペースに塩素ガスが溜まるのでなんらかの対策が必要/使用時の発生に対しても換気扇の対策を必要とする場合がある	同左	高濃度で使用される事が多いので、環境や人に対する影響が大きい/手荒れ、廃水処理設備へのダメージ、酸の混合による塩素ガス生成等	高濃度で使用すると左に同じ	混合比率を間違えると塩素ガスを発生する(塩素ガス中毒症状)
クロロホルムの生成	有機物と接触してもクロロホルムは生成しにくい	同左	同左	有機物と接触するとクロロホルムが生成する	アルカリ側では同左	生成しにくい(但し、pH6以下)
捨水	無し	原水の約半分の殺菌力のない水が生成される	同左	希釈使用なので捨水無し	無し	無し
原料	希釈塩酸(又は塩酸・食塩)/塩酸の管理が必要	食塩	食塩	次亜塩素酸ソーダ製剤	食塩	次亜塩素酸ソーダ・酸・水
塩の析出	塩を添加していないので噴霧しようや後濯ぎなしで使用できる	使用後乾燥すると食塩が残留する	同左	同左	同左	同左
適用法	食品添加物	同左	同左	同左	食品添加物と同等	食品添加物外